

むかし、むかしあるところ

お婆さんが川で洗濯をしていると、川の向こうから

どんぶらこ どんぶらこと大きな桃が流れてきた。お婆さんは、その桃を家に持って帰り芝刈りから帰ってきたお爺さんと一緒に桃を切ろうとしたところ、桃から玉のような男の子が生まれた。お爺さんとお婆さんは、その赤ん坊を

「桃太郎」と名付けて大事に育てた。桃太郎はすくすくと育ち、ある時村の人々を脅かす鬼ヶ島と言われる島にすむ鬼のことを聞き、鬼退治に出かけた。

手には日本一と書かれた旗をもち、額にはましまき、腰にはお婆さんが作ったきびだんごと日本刀を持った。鬼ヶ島に行く途中、きじとさると犬がきびだんごをあげた代わりに鬼と一緒に退治するのに加わった。

桃太郎ときじとさると犬は、見事鬼を倒し退治して、人々から奪った財宝を取り戻した。

鬼たちは、戦いの最後にいくら戦っても歯がたたない桃太郎に尋ねた。

「あっあなたはいったい」

そして鬼の親分である黒鬼が続いて尋ねた

「桃太郎、あなたはいったい何者ですか……。俺たち鬼たちがかなわないのはただ一人……」

これは、桃太郎が生まれるそれ以前のおはなし……



むかしむかし、はるかむかしのおはなし

広い海の真ん中に、岩ばかりでかこまれたぶきみな島があった。

その島の下で大きな地震^{じしん}がおき、その地震^{じしん}のせい^{つな}で繋がってははいけない場所につながる穴ができてしまった。

その穴は、命あるものが存在するこの世と死んだものが行くべき場所あの世、あの世には天国と地獄があり

その穴は地獄^{じごく}に繋がってしまったのである

天国にはすべてをつかさどる神がいて、神をお守りする天女^{てんにょ}(天使)がいる。

天国は、まっとうに生きたものが生まれ変わる日まで見守られ、神は生まれ

かわるものに命をあたえる

地獄^{じごく}は、命あるときに罪をおかしたものが生まれ変わるまで罪をつぐなうところ、地獄^{じごく}には、地獄^{じごく}を支配する王、えんま大王とえんま大王に使える地獄の案内人の鬼たちがいる

えんま大王は鬼よりはるかに大きく人相は恐ろしく怖いが神である。この世とあの世とこの世の境目に身をおき死んだ者たちを天国におくるか地獄におくるかを決める大事な役目をはたしている。

死んだ者は三途の川を渡った後、必ず一度えんま大王のもとにおくられ、天国か地獄^{じごく}か進むべき道を決められる。



地獄^{じごく}の鬼たちは死んだ人間たちが罪^{つみ}をつぐなうよう、人間が恐れおののき^{さか}逆らうことができないようにえんま大王自身が生み出した怪物である。怪物ではあるが、鬼はえんま大王のいる地獄ではえんま大王のいうことは絶対であり、えんま大王に逆らうことは絶対にはない。鬼はえんま大王には忠実^{ちゅうじつ}でえんま大王に屈している。なぜなら、えんま大王は鬼を生かすことも、消すこともできるのである。

もし、えんま大王に逆らえば鬼たちは消されるのだ、消された鬼は人間のように生まれかわることができない。

しかし、えんま大王は心配であった。

鬼は人間の数と同じようにかずしれないくらいいる、ほとんどは大人しい鬼でえんま大王に屈しているが、権力をもち強い力をもつ鬼の中には力をふりかざし時には地獄をかきみだす鬼もいた。

度が過ぎるものはえんまの手により消滅させられていたがすべてではなかった。

また、鬼はえんまが生み出したもの、えんま大王も自分が生み出した鬼をむやみやたらに消したくはなかったのである。

死者たちに気付かれることはもちろんのこと、もし、この世と地獄^{じごく}をむすぶ穴に



その鬼たちが気付き地上におりてしまうことがあれば恐ろしいことになる、

えんま大王の手が届かぬ地上におりてしまえば鬼たちは本来の鬼の心となり

地上を荒らし人々を脅^{おびや}かすのが目に見えていたからだ。

えんま大王は神であり神は地上におりることは許されない。

えんま大王はいつでも早くその穴をふさごうとしていたが、えんま大王の魔力^{まりょく}をもってでも自然の力によってできた穴の威力は強く少しづつしか穴をふさぐことができなかった。

えんま大王は、次々に送られてくる死者たちを裁^{さば}かねばならなかったため合間をみてはその穴の場所へ行き魔力を使い穴をふさごうとしていた。

まわりにはけっかいをはり見えなくし、誰もちかづかぬよう門番としていつもそばについている信頼できる鬼、地獄ではえんま大王の次に体が大きく大鬼と呼ばれているを2人見張りにつけていた。えんま大王の傍で使えるのは何万という鬼の中で大鬼はたった4人だけであった。

地獄ではえんま大王の次に体が大きいので大鬼と呼ばれている、

大鬼はえんま大王が最初にで生み出した鬼たちである。

他の鬼たちはこの大鬼四人にも逆らうことができなかった。

「もう少しだ、もう少しでふさぐことができる。早くせねば鬼たちに気付かれてしまう」

穴を見張っている大鬼の一人がえんま大王に言った。

「えんま大王様の力を持ってでもふせげないなんて、自然の力というのは恐ろしいですな。」

「わしの力が足りぬのだ、天国の神であればこんな穴すぐふせげるのだろうが。」

ここは地獄、地獄の神である私がなんとかするのがすじというもの」

大鬼はまたえんま大王に言った。

「大丈夫ですよ、ここは私と後の三人の鬼が交代で見張っております。

鬼とてえんま大王様のいない地上なんざ行っても楽しくもなんともないですぜ」

えんま大王は大鬼の言葉を聞き答えました。

「そんなことをいうのは大鬼であるお前たち四人だけだ。

他の鬼の中にはわしがうっとおしいと思っておるものもいるであろう。わしの下では、大暴れできないからな。」

鬼はぶるぶると一瞬震えて言いました。

「おお、なんと恐ろしい鬼がいるものだ。そんな鬼は叩きのめしてやらねば」

そんなえんま大王と大鬼とのやりとりを岩の陰からこっそり盗み聞きしていたものがいた。

じゅうべえは、生きていたころに幾度も盗みを働き、罪もなき人間の命をむやみに奪っていた極悪人である。



じゅうべえは、地獄^{じごく}を屁とも思っていなかった。それどころか極悪人^{ごくあくにん}であるじゅうべえは地獄^{じごく}の空気を気^きに^にて地獄^{じごく}でも居座^{ゐざ}りたいがため悪さばかりを繰り返していた。

じゅうべえはその穴のことを知り陰でニヤリと笑った。

「へへへ、地上と地獄^{じごく}をつなぐ穴だって。これは面白いことを聞いた、鬼が地上にか くくっ」

じゅうべえはそそくさと、鬼の中でも一番権力をもつ火の山の門番 黒鬼のところへやってきた。

じゅうべえはこっそりと岩のかげにかくれて黒鬼を誘った。

「黒鬼の親分、強くてもっとも恐ろしい黒鬼の親分ちょっと来てくんなせえ」

黒鬼は陰にかくれてこそこそてまねきをするじゅうべえをみると大きな金棒をふりかざしそう驚かした

「おまえは極悪人じゅうべえ！また、このようなところに……」

じゅうべえはあわてていった

「待ってくだせえ、待ってくだせえ。黒鬼の親分、いつかつぶやいてましたよね。

人間なんざ滅びてしまえばいいと……」

黒鬼は、おなじように力をもつ鬼たちと話していたときにちょこっと

くち^{すべ}を滑らせてしまったのである



黒鬼は手を止めて心の中で思った

こいつ・・・あの時いたのか・・・地獄をうろちょろしよって

「しっ！ えんまさまに聞かれるではないか！ そのようなことは言っておらん！」

じゅうべえはにやにや笑いながらまた言った

「ほんとですかい？ 死んだ人間でなくて地上にいて生きた人間たちを脅かしたいと思っていないせんかい？ 地上であればえんま様もいませんぜ黒鬼の親分の天下ですぜ。」

黒鬼は怖い顔でじゅうべえをにらみつけた

「おまえ、何をたくらんでおる！ この黒鬼様をたぶらかしおって！」

じゅうべえはすぐさままた答えました

「地上に行く方法を見つけたですわ、けどためらっていては地上にいけなくなってしまいますぜ？ えんま様がもうすぐ穴を閉じてしまい

ますから。聞きたくありませんか？ 別にいいというなら構いせんがねえ へへっ」

黒鬼はじゅうべえのことばに耳を傾けた。

「穴だと？ 地上にいけるだと・・・うそではないな・・・」

じゅうべえは、しめしめと思い黒鬼に穴のことを詳しく話した。



黒鬼は今まで考えたこともなかったが心を震わせた、地獄ではえんま大王の目からは逃れることができない、死んだ人間ではなく生身の人間が恐れおののくのをみたいと。しかし、地上にさへいけばえんま大王の手からはなれ自由になれる、

大鬼もいないおれさまの天下だと、地上を支配できると黒鬼

は、自分の子分である鬼たち数人を集めて穴の話をした。

鬼たちはそれぞれに口走った

「それは、本当ですかい。極悪じゅうべえめ。えんまさまの後をつけるとはどこまで性悪なんだ。」

「しかし、罪の犯した死んだ人間を脅かすことしごくことがわしらの仕事ですわな、生きた人間なんざ考えたこともございませ

んぜ」

「それにえんま様に逆らうなんざ怖くてできませんぜ、大鬼

の兄貴たちになぎりつぶされますぜ」

黒鬼は子分たちにいった。



「馬鹿め、生きた人間だからこそ楽しいのだ。じゅうべえを見て見ろ、煮えたぎった鍋に入れても次の瞬間にはけろっとしてやがる。死んだ人間をいくらおれたちが脅しても同じだ。それに、おまえたちこのままでいいのか、ここではえんま様がいるかぎり俺たちは誰もが恐れおののく鬼でありながらいつまでもしたっぱのままだ」

子分の鬼たちは目を合わせ、その中の赤色の肌をした鬼が言った。

「それはそうですが親分、もし失敗してばれてしまつては俺たちは間違いなくおわりですぜ・・・」

鬼たちは一瞬震えた。そこへこそこそと腰を低くしながらじゅうべえがやってきて鬼たちに言った。

「鬼の親分さんたち、決意しましたですかい？早くしないと穴がふさがってしまいますぜ。

黒鬼はいらいらしながら子分たちに言った。

「ええい、意気^{いくじ}地のない鬼たちが！おれさまだけでもいってやるわ」

じゅうべえは黒鬼に言った。。

「そうなくては、黒鬼の親分。いいですかい、大鬼様は私がうまいこといって穴から引き離しますからそのすきに穴に飛び込んでくだせえ。」

えんま大王が人間たちに行き場を支持しているすきに黒鬼はじゅうべえを地獄を案内するふりをして穴の方に向かった。ためらっていた他の子分たちも黒鬼の親分が行くならと後からじゅうべえと黒鬼の後をつけていた。遠くからは白くもやがかかっている見えなかったが、じゅうべえの案内した岩陰からは穴と大鬼の姿が見えた。

穴の傍^{そば}には大鬼一人だけであつた。

この度は、「桃太郎のすべて」 立ち読み版をご覧頂き誠に有難うございます。

サンプル版はここまとなっております。

続きをご覧になりたい場合は **Amazon kindle** にて **162 円**にて販売中です。

Amazon さいとにて「桃太郎のすべて」でご検索ください。

今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。